

<もっと知りたい薬の話>

7 漢方シリーズ2 (小児喘息)

小児に漢方薬なんて、苦くて飲めないと考えてしまうかもしれません。しかし実際には、そのまま飲める子もいれば、蜂蜜と混ぜて飲む子もいます。

また、漢方薬は、喘息に対しては、成人と比べ小児のほうが効果的な場合が多く、副作用も非常に少ないので、まさに『小児にこそ漢方薬は適している』といえます。

透明な痰や鼻水をだし、くしゃみを伴いゼーゼーするタイプ (肺寒痰証)

寒邪が肺を犯し、呼吸機能の障害をもたらして、喘息発作をおこします。肺寒痰証はすべての小児期を通じて、アトピー型喘息児の季節の変わり目の発作や、夜間～早朝時の発作、感冒に伴う発作などでみられます。

- ・透明～白い痰を出す、咳やゼーゼー、鼻水
- ・鼻づまり、くしゃみ、悪寒、発熱、頭痛、身体痛、 顔色が青い、温水を好む
- ・寒冷によって発作をおこしたり、悪くなったりする。

黄色い痰や鼻水をだしてゼーゼーするタイプ (肺熱痰証)

熱邪が肺を犯して痰を生じ、呼吸機能に障害をもたらし、喘息発作をおこします。肺熱痰証は、小児期を通じて、細菌、マイコプラズマ、一部のウイルス感染などに合併しておこる喘息発作にしばしばみられます。

- ・黄色い粘っこい痰をだす、咳やゼーゼー
- ・黄色い鼻水、鼻づまり
- ・悪寒、発熱、頭痛、身体痛、顔色紅潮、焦燥感
- ・黄色い苔のついた紅い舌、口が渴き冷水を好む

【痰とは？】

漢方でいう痰は、西洋医学や一般でいう痰とは、少し意味に違いがあります。肺、脾、腎などの働きが異常になったり、邪に犯されたりして、津液が濃縮されて生じるものです。気道から分泌されて目にみえる喀痰だけを指すわけではありません。

しょちゅう熱を出してはゼーゼーするタイプ (肺経鬱熱証)

熱邪が肺だけでなく、肺と通じるのど、鼻に常時停滞したもので、何らかのストレスで熱邪が活動し、発熱、ゼーゼーが始まります。肺経鬱熱証は小児の慢性扁桃腺炎、慢性鼻炎、慢性副鼻腔炎に伴う喘息で時々みられます。

- ・いつも扁桃腺が紅く腫れている
- ・いつも黄色い鼻水を出している
- ・しょちゅう熱を出し、そのたびゼーゼーする
- ・黄色い痰、黄色い苔のついた紅い舌、焦燥感
- ・口が渴き冷水を好む

乾いた咳をし、ヒューヒューいって痰もでないタイプ (肺燥痰証)

燥邪が肺を犯し、呼吸機能の障害をもたらし、喘息発作を起こします。肺燥痰証は、幼児学童期のアトピー型喘息の発作時や、マイコプラズマ、百日咳、細菌、一部のウイルスなど、感染に伴う喘息発作などにたまにみられます。

- ・こみ上げるように咳き込んで、ヒューヒューする
- ・痰はないか、あっても粘っこく出にくい
- ・ときに血痰が混じる
- ・口・鼻・唇が乾燥する、のどが渴き水を欲しが

多量の痰でゼロゼロし咳き込んで痰を吐くタイプ（肺湿痰証）

湿邪が肺を犯して痰を生じ、呼吸機能の障害をもたらして喘息発作を起こします。肺湿痰証は乳児喘息でよくみられます。

- ・多量の痰でゼロゼロし、咳き込んで痰を吐く
- ・よだれが多い、だるそうにする、めまい
- ・食欲はないか、あっても食後に痰が増える

【邪とは？】

人体に与える悪影響の単位です。この邪は、各々の人体が受けた悪影響の結果生じる、症状の組み合わせの特徴によって分類されます。西洋医学的には同じウイルスに感染しても、感染した人や時期が異なり、その結果異なった症状を起こすと、漢方的には異なる邪に影響されたと考えます。

胃腸が弱く、痰の多い発作を起こし、長引くタイプ（脾気虚証）

食事の不摂生、疲労、ストレス、繰り返す喘息発作などが脾の気を消耗し、脾の飲食物を消化吸收機能する働きが低下し、その脾から痰が生じて、これが肺を犯し喘息になります。脾気虚証の小児喘息は、乳幼児期の長引く喘息によくみられます。

- ・日頃から元気がなく、疲れやすい
- ・食が細く下痢しやすい、よだれやげっぷが多い
- ・発作は、痰が多くゼロゼロして、長引く
- ・痰は食後に増え、咳き込んで痰と一緒に食べ物を吐く

いらいらしやすく、ストレスで発作を起こすタイプ（肝気鬱結証）

過剰なストレス（小児では夫婦げんか、過剰なしつけ、乳児期以来のスキンシップや愛情不足、いじめなど）を長期にうけると、肝の気が滞り、全身の気の巡りが悪くなり、情緒障害や不定の身体症状を生じます。滞った気は、肺の呼吸機能の障害をもたらす、喘息になります。

- ・わがままで、思い通りにならないとヒステリックに泣き叫ぶ、集中力、落ち着きがない、内気
- ・爪かみ、チック症
- ・よくお腹や頭を痛がるが、原因となる病気がない
- ・ストレスで嘔吐、下痢、喘息発作をおこす

成長発達が遅れ気味で、乳児期よりの喘息がながびいているタイプ（腎虚証）

生まれつき腎の精気が不足してたり、病気が長引き腎の働きが衰えると、腎の水分代謝機能が低下し、痰を生じて肺を犯したり、腎の呼吸機能を助ける働きが衰えたりして、喘息になります。腎虚証は乳児早期から起きる喘息や、しつこく長引いた喘息に、時折みられます。

- ・成長発達が遅れ気味、虫歯が多い、元気がない、動作がのろい、足腰が疲れやすい、不器用
- ・感冒にかかりやすく長引く、寝汗、のぼせ

- ・息を吸うときにゼーゼーする
- ・冷たい飲み物を好む

軽い発作でも息切れし、すぐ苦しそうにするタイプ（肺気虚証）

病気が長引き、肺の気を消耗し不足すると、肺の呼吸機能の障害をもたらす、肺気虚証の喘息になります。全小児期でたまにみられ、脾気虚証、腎虚証をよく併発します。

- ・元気がない、疲れやすい、寒がり
- ・汗をかきやすい、感冒にかかりこじれやすい
- ・疲れると発作が起きる
- ・声に力がない、軽い発作でもすぐ息切れし、苦しそうにする

口や皮膚が乾き、痰の少ない発作を起こすタイプ（肺陰虚証）

肺陰虚証の喘息は、病気が長引き、肺の津液を消耗して不足したときに起こります。小児では比較的稀な型と思われませんが、アトピー性皮膚炎を合併する喘息や、百日咳、マイコプラズマ肺炎に続発する喘息などに、たまにみられます。

- ・痩せ、皮膚の乾燥、口・のどの乾き
- ・冷たいものを好む、寝汗、のぼせ、微熱
- ・発作はヒーヒーいってこみ上げるように咳き込む
- ・痰は無～少量、ときに血痰がある

漢方は予防治療が得意！

漢方では、どのような病気であれ、その予防が高級な医療と重視されています。喘息の場合、発作の予防が重視され、もし発作を起こしていても、その発作を治療した後、次の発作を予防する治療がより高級な医療とされているのです。これを「上工(じょうこう)」といいます。そして事実漢方薬は、喘息の発作予防に効果的です。その効果は、漢方薬の内服を始めてから数日で現れることもありますが、多くは2～3ヶ月から半年で徐々に現れることが多いようです。さらに漢方で予防治療すると、併用しているさまざまな西洋薬の減量も期待できます。このことは、ステロイド内服薬など、副作用の強い薬を使用している場合、特に重要なことです。

また、発作時の治療では、西洋薬には効果的なよい薬があるので、それを使用するのが無難です。しかし、なかなか満足できる効果があがらない場合には、漢方薬を併用すると、病状が好転することがしばしばあります。

参考文献：イラストでわかる漢方
ユリシス出版部 梁 哲宗